

若年層における感動詞の独立性

VUONG Thi Bich Lien *・有元 光彦

Independence of the Exclamation used by the Young Generation in Japanese Language

VUONG Thi Bich Lien, ARIMOTO Mitsuhiko

(Received September 27, 2013)

1. はじめに¹

本稿の目的は、若年層における感動詞を対象として、感動詞の動態を捉えることにある。特に、動態の中でも、若年層が使用する感動詞には品詞の転成が頻繁に起こっている。そこには、従来感動詞の性質と言われてきた「独立性」の変化が観察される。本稿では、その独立性の観点から、感動詞の性質について議論していく。

感動詞は、(1)のような談話から分かるように、特に話し言葉では様々な形式で頻繁に現われている。²

- (1) 010207A: うん、うん。確か。確か。
010208B: えー、しおりちゃん一緒なんだ。
010209A: 多分。いやー、分からん。
010210B: まじか。全然見とらんかったな。
010211A: うーん。
010212B: あー、やば。
010213A: うーん。どうなるんやろう。
010214B: どうもならないと思うけど。もうこうなってしまった以上。
010215A: あー、しかも、父さんと母さんも英語学専攻しとったけん大学で。
010216B: えっ、そうなん。へー。

下線部が感動詞と呼ばれるものであるが、これらはすべて独立語として文頭に現れるか、または一文として現れていることが分かる。このように、感動詞は従来高い独立性と非分析的意味を持つものと考えられてきた。しかし、それゆえ感動詞というカテゴリーの中には様々な種類

* Thanglong University

¹ 本稿は、Vuong Thi Bich Lien (2013) を基盤とし、その分析を再構築したものである。本稿は、平成22～25年度山口大学大学院東アジア研究科・プロジェクト研究「東アジアの教育におけるグローバル化と伝統文化」による研究成果の一部である。

² データの左にある数字等は以下の通りである。最初の2桁は談話データ番号である。「01～06」は第1回調査、「07～09」は第3回調査、「10」は第4回調査、「11」は第5回調査のデータである。次の4桁は、それぞれの談話の中における発話の通し番号である。最後のアルファベットは発話者を便宜的に示している。

のものが入ってくる事態となってしまった。これは、感動詞という術語の他に、「応答詞」「感嘆詞」「相づち詞」などの様々な名称が使用されていることから明らかであろう。

しかし、問題は名称だけではない。近年の若年層の談話を観察すると、次のようなデータも出てくる。

- (2) a. 010326B: おやが公務員じゃけすごいすめてくるけどさ、うーん。そこまで頑張つてまでやりたいことがあるかっていったら、
010327A: あー。
010328B: やっぱりうーんってなるわけよ。
010329A: なるほどね。
- b. 010616B: 行って、行こうやあつて言われて、私ブランド物超興味ないのにとか思いながら行って、2人でずっと見とって値段がうわーみたいなの。
010617A: わー。
- c. 050507A: もう断つて、断つていたら、どうするんか文書を書いて出してって、いや、私がやることじゃなくて、やっぱり幹事さんがちゃんとやっちゃった方が良くないじゃないですか、いいじゃないですかって理事会に言った。
050508B: ん。
050509A: あ、そうか、じゃ、とって、幹事にやつといてって、幹事もはあつ。

(2)を見ると分かるように、感動詞と考えられる下線部の単語は文中に現れている。しかも、他の単語が後続することから、独立していないように見える。即ち、感動詞はもはや独立性の高いカテゴリーではなくなっているということに他ならない。

そこで、本稿では、若年層に現れる感動詞の性質の変化を、独立性という問題に焦点を当て、追究していくことにする。

2. 先行研究

独立性を議論する出発点として、感動詞の品詞転成に関して記述しなければならない。感動詞の品詞転成に関しては、古くから議論されている。例えば、三矢重松（1908）には次のような例が挙げられている。

- (3) a. あ、痛い。(感動詞)
b. あという声(名詞)
c. あと嘆く(副詞)

三矢氏によると、(3 a)の「あ」は、後続の「痛い」から独立して感情を表すので、感動詞であるが、(3 b)の「あ」は感動詞ではないとしている。ここでは、「という」を媒介して「声」を修飾するので、名詞になったと考えている。(3 c)の「あ」も、感動詞ではなく、「と」と動詞「嘆く」の前に来るので、副詞に転じたものであると解説されている。このように、同じ「あ」であっても、様々な品詞で現れる。おそらく、(3 a)の「あ」は単独で用いられていることから独立性が高く、それに対し、(3 c)の「あ」はすでに「と」との結び付きが強くなったため、独立性が低いと考えられる。

独立性に関して明記しているものとしては、橋本進吉（1979：18-19）がある。次に、一部を引用する。³

- (4) 「それでは、語とはどんなものであるか。語はそれぞれ意味をもっている。それ故、意味を有する言語の単位の一つであつて、文節を構成するものである。これは二種に分つて考へなければならない。第一種は、それ自らで一文節を成し得べきである語である。前に挙げた「山」「川」「行く」「思ふ」など（「一語一文節」と標したものは、之に属する。第二種は、「の」「を」「と」「て」「さへ」「が」「だけ」「た」「たい」「です」「う」「よう」など（助詞助動詞）の類で、それ自らで一文節を形づくる事なく、常に第一種の語に伴ひ、之と共に文節を作るものである。【中略】然るに、第二種の語があつて、第一種のものと共に一文節を構成するのである。その場合には、第一種の語も第二種の語も文節の一部分となつて、その間に切れ目をおく事なく一つゞき発音せられる。第一種の語がそれだけで文節を成す場合には、実際の言語に於てその語の前と後とに切れ目をおいて発音する事が出来るのであつて、前後に切れ目をおいて、それだけ切り離して発音する事を、形の上から見て独立したものであるとするならば、第一種の語がそれだけで文節を作る事が出来るのは、それが独立し得るものであるからであつて、第一種の語は独立する事が出来る語であるといつてよいのである。」

ここでは、ポーズの存在が独立性を測る指標となっている。

また、山口佳紀（1976：153）には、「と」と独立性との関係を述べた部分もある。次に引用する。

- (5) 「一方、「と」の消失の起こり得る(0)以下においては、語基に接尾語「り」が加えられているか、語基の反復が行われている。この「り」は、語基の状態的な意味を保ちながらこれに独立性を与える要素であろうし、また、単独では独立性のない語基も、反復によって独立性を得たものと解される。したがって、「と」の消失が可能なのは、副詞幹に独立性が存する場合に限られることになる。」

ここでは、「と」の接続が独立性を決定する指標になると述べられている。

以上から分かるように、感動詞の独立性を測る場合には、次のような指標を設定することができる。

- (6) a. 単独で直後にポーズを伴って現れる場合、または反復形で現れる場合、その感動詞は独立性が相対的に高い。
b. 直後に「と」等を伴って現れる場合、その感動詞は独立性が相対的に低い。

これらの指標は、それぞれ「有～無」といった二項対立ではなく、幅を持ったスケールのようなものである。本稿でも、これらの指標・スケールを利用して、感動詞の独立性に関する議論を展開していく。

³ (4)の引用は、元々漢字が旧字体であるが、ここでは新字体にしている。

3. 調査概要

本稿では、感動詞の独立性という性質を統語的に捉えるために、2回の調査を実施した。これらの調査は、Vuong Thi Bich Lien (2013) における一連の調査・研究の一部である。Vuong Thi Bich Lien (2013: 36-191) では、全部で5回の調査が実施されているが、本稿の対象となるのは、そのうち第4、5回調査のみである。

第4、5回調査では、感動詞の独立性を調べるという目的で、動詞との組み合わせパターンを中心に、感動詞の含まれる文の文法性を判断してもらった。調査は、それぞれ2012年2月、4月に行った。インフォーマントは20歳代の大学生6人である。⁴インフォーマントは3人ずつ2組に分かれ、グループごとに約2時間程度のインタビューを実施した。

第4回調査の目的は、感動詞の直後にポーズや助詞「と」が共起するかどうかを明らかにすることにある。第5回調査の目的は、第4回調査において独立性が明らかにならなかった「いやー」「ええああ」「うーん」「うわっ」「わー」などの感動詞と、ポーズや助詞「と」との共起関係、感動詞の反復の可能性を、様々なコンテキストで詳細に考察することにある。

4. 分析

本節では、感動詞の独立性についての調査結果を考察していくことにする。

第4、5回調査では、次のような6種類の構文パターンを利用して、インフォーマントに文法性の判断をしてもらっている。⁵

- (7) a. パターン① [[[E] ϕ] V] : (例) お父さんは息子の話をふーん聞いている。
 b. パターン② [[[E]・] V] : (例) お父さんは息子の話をふーん・聞いている。
 c. パターン③ [[[E] と] V] : (例) お父さんは息子の話をふーんと聞いている。
 d. パターン④ [[[EE] ϕ] V] : (例) お父さんは息子の話をふーんふーん聞いている。
 e. パターン⑤ [[[EE] と] V] : (例) お父さんは息子の話をふーんふーんと聞いている。
 f. パターン⑥ [[[E] と] [[E] と] V] : (例) お父さんは息子の話をふーんとふーんと
聞いている。

独立性の観点から言うと、(6)で設定した通り、パターン①②が適格である感動詞が最も独立性が高いと言えよう。ただし、ポーズは音声的な問題であるため、統語的な問題と同様に扱うことができるかどうかは議論の余地がある。同様に、統語的に独立性が高いと考えられるのは、パターン④である。それに対して、独立性が低いと考えられるのは、パターン③⑦⑧のような「と」を伴うものである。「と」が付くことによって、感動詞は別の単語、即ち副詞、を形成す

⁴ インフォーマントの属性として、出身地域は考慮していない。本稿で示す言語現象に方言差が関わるかどうかについては保留する。

⁵ 記号 E, V はそれぞれ感動詞、動詞を表す。記号 EE は感動詞の反復を示す。記号 ϕ は空 (empty) であることを表す。また、記号・はポーズ (pause) を示す。調査では「パターン④ [[[E] に] V]」「パターン⑤ [[[E] みたいに] V]」「パターン⑥ [[[E] だど] 思う]」も調べているが、本稿での議論には直接関係ないので、結果は省略する。なお、第4回調査では、パターン⑥については一部しか調査していない。第5回調査では、パターン④⑤については調査していない。

ることになる。⁶さらに、「と」が付いた形式の反復が許容されるということは、「E と」が1つの単語として認識されていることに他ならない。ここでは、感動詞そのものの独立性は最も低くなっていると言えよう。

以上のような独立性のスケールに基づいて、以下の節では感動詞の違いを見ていく。

4. 1. 第4回調査結果の分析

本節では第4回調査結果を分析する。調査で使用した文を次に挙げる。

- [1] お父さんは息子の話をふーん聞いている。
- [2] 彼女は部屋の奥に座っている男の人をへー見て、部屋を出て行った。
- [3] 彼はええああ話していて、なかなか一文になっていない。
- [4] 友達は鈴木さんの意見にうんうん答えた。
- [5] 会長は鈴木さんの説明を聞いているとき、そうそう賛成していた。
- [6] 兄は弟の質問を聞いていると、うーん考えていた。
- [7] 彼は、本を持ち、うーん歩いていた。
- [8] お母さんは息子の答えを聞いたら、はあっ立ち上がった。
- [9] 「今日は、AKB グループにも出演していただきますよ」と聞いたら、会場にいる人がみんなおー拍手した。
- [10] A：昨夜ね、すごい夢を見たよ。
B：何を見たの？
A：宝くじに当たって、うわっお金をもらったのよ。
B：へー。
- [11] A：先週一緒に買ったシャツを着てないね。
B：実は、今朝、着ようとしたが、棚から取り出したら、いやー汚れちゃったのよ。
- [12] TOEIC 試験の900点を見たら、わー喜び、飛び上がった。
- [13] 彼女の家へ行く途中で、雨がうわっ降ってきて、びしょ濡れになっちゃった。
- [14] 社長は部下が会議に遅れた理由を聞いたら、はあっした。
- [15] A：その話、もう聞いた？
B：聞いた聞いた。
A：どう思う？
B：そうだね。最初はちょっとえーっ思っていたが、今は彼女みたいな人ならあり得るね。

これら [1] ~ [15] はパターン①の文である。調査では、これらの文を(7)の他のパターンに換えたものも調べている。すべてのパターンの文法性は、【表1】のようにまとめられる (cf.

⁶ 例えば(7)のパターン③の「ふーんと」において、これ全体を副詞と捉えるのではなく、「と」を引用を示す助詞として、「ふーん」を引用句(名詞)として、それぞれ捉えることも可能である。このような混乱を避けるために、調査時には、インフォーマントに対し、「ふーんと」が副詞である旨のことを事前に説明した上で、文法性の判断をしてもらっている。

VuongThi Bich Lien (2013 : 68-86)。⁷

【表1】第4回調査結果

番号		① [[[E] ϕ]V]	② [[[E]・]V]	③ [[[E]と]V]	⑥ [[[EE] ϕ]V]	⑦ [[[EE]と]V]	⑧ [[[E]と] [[E]と]V]
[1]	ふーん	×	×	◎	△	△	×
[2]	へー	×	×	◎	×	◎	×
[3]	ええああ	×	◎	◎	×	△	×
[4]	うんうん	△	×	◎	×	△	×
[5]	そうそう	×	◎	◎	×	△	×
[6]	うーん	×	×	◎	○	◎	◎
[7]	うーん	×	×	◎	×	◎	◎
[8]	はあっ	△	×	◎	×	×	×
[9]	おー	◎	◎	◎	×	○	×
[10]	うわっ	△	◎	◎	×	◎	◎
[11]	いやー	×	◎	◎	○	×	×
[12]	わー	×	×	◎	○	◎	◎
[13]	うわっ	×	×	◎	×	◎	○
[14]	はあっ	×	×	◎	×	×	×
[15]	えーっ	×	×	◎	×	◎	×

【表1】を見ると分かるように、まずパターン③はすべての感動詞において許容されている。「と」の直前は名詞が来るので、すべての感動詞が名詞として働くことができることになる。従って、パターン③においては感動詞の違いは見られない。

その他のパターンにおいては、感動詞によって分布が異なる。まず、最も独立性が高いパターン①②が適格であるのは、[9]「おー」だけである。具体例を次に挙げる。

- (8) a. ◎「今日は、AKBグループにも出演していただきますよ」と聞いたら、会場にいる人がみんなおー・拍手した。
 b. ◎「今日は、AKBグループにも出演していただきますよ」と聞いたら、会場にいる人がみんなおーと拍手した。
 c. ×「今日は、AKBグループにも出演していただきますよ」と聞いたら、会場にいる人がみんなおーおー拍手した。
 d. ○「今日は、AKBグループにも出演していただきますよ」と聞いたら、会場にいる人がみんなおーおーと拍手した。

⁷ 記号の凡例は以下の通りである。

- ◎：3人のインフォーマント全員が言えると回答したもの
- ：2人のインフォーマントが言えると回答したもの
- △：1人のインフォーマントだけが言えると回答したもの
- ×：全員が言えないと回答したもの

- e. ×「今日は、AKBグループにも出演していただきますよ」と聞いたら、会場にいる人がみんなおーとおーと拍手した。

ただし、この感動詞はパターン⑦でも適格性が高くなっている。

次に、パターン②が適格である感動詞は、[3]「ええああ」、[5]「そうそう」、[10]「うわっ」、[11]「いやー」である。この中で、[11]「いやー」は、パターン⑥でも文法性が高い。[11]「いやー」の例を次に挙げる。

- (9) a. A: 先週一緒に買ったシャツを着てないね。
B: ◎実は、今朝、着ようとしたが、棚から取り出したら、いやー・汚れちゃったのよ。
- b. A: 先週一緒に買ったシャツを着てないね。
B: ◎実は、今朝、着ようとしたが、棚から取り出したら、いやーと汚れちゃったのよ。
- c. A: 先週一緒に買ったシャツを着てないね。
B: ○実は、今朝、着ようとしたが、棚から取り出したら、いやーいやー汚れちゃったのよ。
- d. A: 先週一緒に買ったシャツを着てないね。
B: ×実は、今朝、着ようとしたが、棚から取り出したら、いやーいやーと汚れちゃったのよ。
- e. A: 先週一緒に買ったシャツを着てないね。
B: ×実は、今朝、着ようとしたが、棚から取り出したら、いやーといやーと汚れちゃったのよ。

ただし、[10]「うわっ」はパターン⑦⑧でも適格性が高くなっている。

次に、パターン⑥が適格である感動詞は、[6]「うーん」、[12]「わー」、[11]「いやー」である。[11]「いやー」は前述の通りである。以下に、[6]「うーん」の例を挙げる。

- (10) a. ×兄は弟の質問を聞いていると、うーん・考えていた。
b. ◎兄は弟の質問を聞いていると、うーんと考えていた。
c. ○兄は弟の質問を聞いていると、うーんうーん考えていた。
d. ◎兄は弟の質問を聞いていると、うーんうーんと考えていた。
e. ◎兄は弟の質問を聞いていると、うーんとうーんと考えていた。

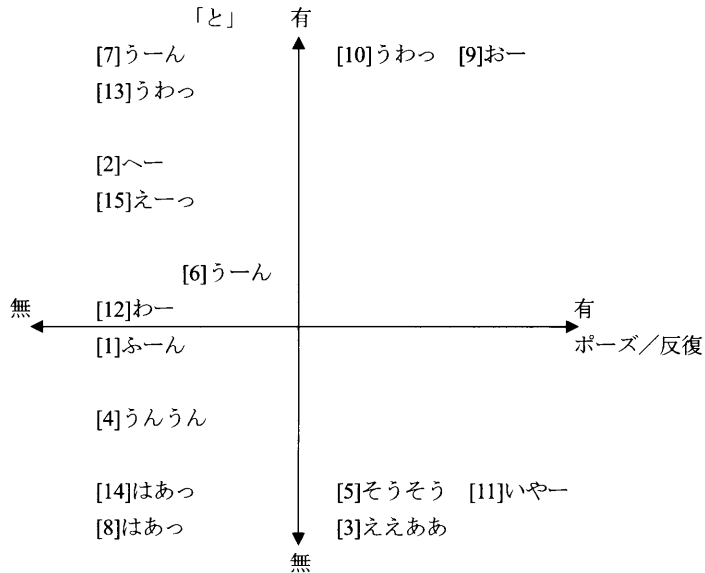
[6]「うーん」、[12]「わー」については、パターン⑥だけではなく、パターン⑦⑧でも文法的であるので、独立性はかなり低いと考えられる。

パターン⑦⑧の適格性が高い感動詞には、[2]「へー」、[7]「うーん」、[13]「うわっ」がある。これらの感動詞は独立性が最も低いものと考えられる。

ただ、ポーズも挿入できないし、「と」も付かないものも存在する。それは、[1]「ふーん」、[4]「うんうん」、[8]「はあっ」、[14]「はあっ」である。次に [14]「はあっ」の例を挙げる。

- (11) a. ×社長は部下が会議に遅れた理由を聞いたら、はあっ・した。
 b. ◎社長は部下が会議に遅れた理由を聞いたら、はあつとした。
 c. ×社長は部下が会議に遅れた理由を聞いたら、はあっはあつとした。
 d. ×社長は部下が会議に遅れた理由を聞いたら、はあっはあつとした。
 e. ×社長は部下が会議に遅れた理由を聞いたら、はあつとはあつとした。

以上より、ポーズの有無／反復、及び「と」の接続の有無という2つのスケールを用いて、15の感動詞を【図1】のように分類できる。



【図1】 感動詞の分類

【図1】から分かるように、感動詞は、2つのスケールによって4種類に大きく分類できる。この中で、最も独立性が高いと考えられるのは、【図1】の右下にある[5]「そうそう」、[11]「いやー」、[3]「ええああ」である。それに対して、独立性が低いのは、左上にある[7]「うーん」、[13]「うわっ」、[2]「へー」、[15]「えーっ」、[6]「うーん」、[12]「わー」である。また、右上にある[10]「うわっ」、[9]「おー」は、ポーズも「と」の接続もあることから、右下のグループと左上のグループとの中間に位置するものと考えられる。

以上より、次のような独立性の階層が仮定できる。

(12) 独立性の階層 α :

「いやー」 > 「そうそう」「ええああ」 > 「おー」 > 「うわっ」 > 「わー」「へー」「えーっ」 > 「うーん」

問題は、左下にある[1]「ふーん」、[4]「うんうん」、[14]「はあっ」、[8]「はあっ」のグループである。これらの感動詞には何らかの差異があるのかもしれないが、本節での独立性の議論の俎上には乗らないものである。(6)の2つのスケール以外のものを考えなければならな

いだろう。

もう一つの問題は、第4回調査では、パターン①～⑧の動詞（V）は1つに絞って調査をしている。当然考えられることは、動詞が異なれば、文法性の判断に違いが出てくるのではないかという点である。そこで、次節では、【図1】の右上、右下、左上の3つのグループから、代表的な感動詞を選び、それぞれ動詞を換えたコンテキストを作成し、文法性の判断を行った。即ち、第5回調査結果を示すことにする。

4. 2. 第5回調査結果の分析

本節では、第4回調査では独立性の詳細が明らかになっていなかった感動詞について、第5回調査の結果をもとに分析する（cf. Vuong Thi Bich Lien (2013: 94-125)）。第5回調査結果をまとめると、【表2】のようになる。

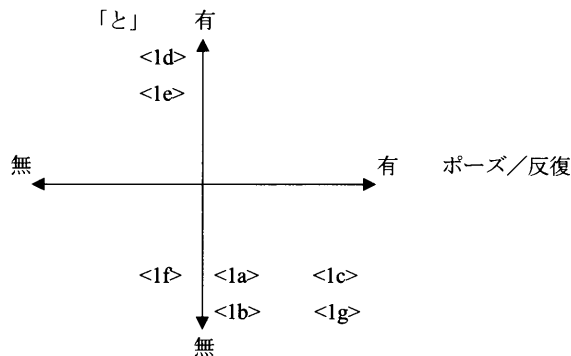
【表2】 第5回調査結果

番号		① [[[E] φ]V]	② [[[E] ・]V]	③ [[[E] と]V]	⑥ [[[EE] φ]V]	⑦ [[[EE] と]V]	⑧ [[[E] と] [[E] と]V]
<1a>	いやー聞いている	×	○	×	×	×	×
<1b>	いやー見ている	×	○	×	×	×	×
<1c>	いやー汚れちゃった	◎	◎	×	×	×	×
<1d>	いやーなった	×	△	◎	×	×	×
<1e>	いやー思っている	×	△	◎	×	×	×
<1f>	いやー座った	×	△	×	×	×	×
<1g>	いやーもらった	◎	◎	×	×	×	×
<2a>	ええああ話している	◎	◎	△	×	×	×
<2b>	ええああ読んでいて	×	×	×	×	×	×
<2c>	ええああした	△	△	×	×	×	×
<2d>	ええああなった	◎	△	△	×	×	×
<3a>	うーん考えていた	○	○	○	△	◎	×
<3b>	うーん聞いている	○	○	○	△	◎	×
<3c>	うーんした	×	○	×	×	×	×
<3d>	うーん思っていた	×	○	◎	×	×	×
<3e>	うーんなった	×	○	◎	×	×	×
<3f>	うーんためらっていた	△	○	◎	×	◎	×
<3g>	うーん歩いていた	△	○	×	×	×	×
<3h>	うーん見て	×	○	×	×	×	×
<3i>	うーんもらえる	◎	○	△	×	×	×
<4a>	うわっお金をもらった	△	○	◎	×	×	×
<4b>	うわっなった	△	○	◎	×	×	×
<4c>	うわっ驚いた	△	○	◎	×	×	×
<4d>	雨がうわっ降ってきた	△	○	△	×	×	×
<4e>	写真をうわっ見た	×	△	×	×	×	×
<5a>	わー喜び	×	×	◎	×	×	×
<5b>	わー飛び上がった	×	×	◎	×	×	×
<5c>	わー興奮して	×	×	◎	×	×	×
<5d>	わー驚いた	△	×	◎	×	×	×
<5e>	わーなった	△	×	◎	×	×	×

まず、< 1 > 「いやー」について見ていく。この調査では、次のようなコンテキストを使用している。⁸

- < 1 >
- a. お父さんは息子の話をいやー聞いている。
 - b. 彼女は部屋の奥に座っている男の人をいやー見て、部屋を出て行った。
 - c. A：先週一緒に買ったシャツ、今日は着てないね。
B：実は、今朝、着ようとして、棚から取り出したら、いやー汚れちゃったのよ。
 - d. A：ねえねえ、聞いた？
B：何があったの？
A：鈴木さん、彼氏に40万の時計をもらったって。
B：へー、そんな。いやーなったよね、彼女は。
 - e. 彼女が1人で20年ずっと子供を4人も育てていたことを聞いたとき、いやー思っ
ていて、自分をもっと努力したいという感じがした。
 - f. お母さんは息子の答えを聞いて、いやー座った。
 - g. 今度のクリスマスにプレゼントをいやーもらいたいな。

< 1 a,b >は、インフォーマントによれば、ポーズが付くと意味が通じ、ポーズがないより自然に言えるとのことである。「と」が付くパターンは不適格であるので、独立性が高いと考えられる。< 1 c,g >は、ポーズがあってもなくても自然に言えるが、ポーズがない方をより多く使用するとのことである。従って、< 1 a,b >よりも独立性が高いものであると考えられる。< 1 d,e,f >は、ポーズが付いて「いやー・なった」「いやー・思っ
ていて」「いやー・座った」となる場合、少々不自然であるとインフォーマントは判断している。ただし、< 1 d,e >では、「と」が付くパターン、「いやーとなった」「いやー思っ
ていて」は自然であるとのことである。従って、< 1 >の感動詞の独立性は【図2】のように図式化できる。



【図2】 < 1 >の分類

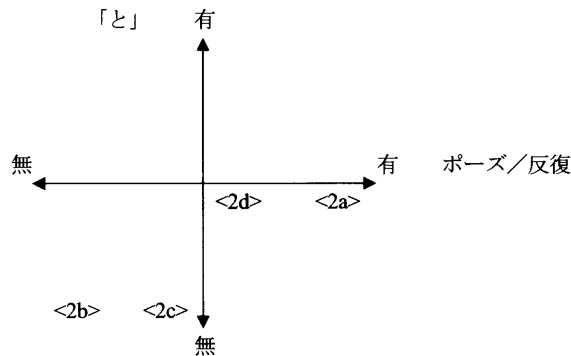
⁸ 以下に挙げる例文は、【表2】のパターン①に相当するものである。実際の調査では、各例文をパターン②～⑧に換えたものもそれぞれ調査している。

次に、＜2＞「ええああ」について見ていく。この調査では、次のようなコンテキストを使用している。

- ＜2＞ a. 彼はええああ話していて、なかなか会話になっていない。
 b. さっきから彼はええああ読んでいるので、いらいらしている。
 c. 急にスピーチを頼まれて、考えながら話したので、ええああした。
 d. 急にスピーチを頼まれたので、考えながら話して、ええああなった。

＜2a＞の「ええああ」では、単独で現われるパターン①、及びポーズが付くパターン②の適格性が高い。「と」が付くパターン③は比較的適格性が低い。＜2a＞と同様のパターンを示すものに＜2d＞があるが、ここではポーズが付くパターン②の適格性が低くなっている。従って、両者とも独立性はあまり高くないと考えられる。＜2c,d＞では、おおよそどのパターンも許容されていない。

以上より、＜2＞の感動詞「ええああ」の独立性を図式化すると、【図3】のようになる。



【図3】 ＜2＞の分類

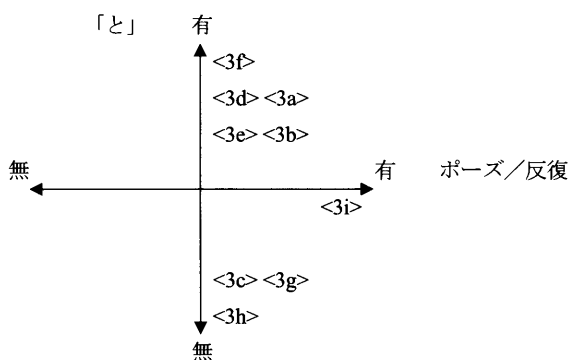
次に、＜3＞「うーん」について見ていく。この調査では、次のようなコンテキストを使用している。

- ＜3＞ a. 兄は弟の質問を聞きながら、うーん考えていた。
 b. 兄は弟の話をうーん聞いている。
 c. 兄は弟の質問を聞きながら、うーんした。
 d. 私は弟の話を聞いて、うーん思った。
 e. 私は弟の話を聞いて、うーんなった。
 f. 彼女に大学院進学のことを尋ねたら、うーんためらっていた。
 g. 彼は、本を持って、うーん歩いていた。
 h. 彼女は部屋の奥に座っている男の人をうーん見て、部屋を出て行った。
 i. 彼みたいな人はプレゼントがうーんもらえるかな。

【図3】から分かるように、まず＜3a,b＞では、ポーズが付いても付かなくても言うこと

ができる。しかし、一方でパターン⑦が適格であることから、独立性に関しては中間的な位置付けになっていると考えられる。〈3c,g,h〉では、「と」が付かない。反復形はないが、ポーズが付くことがあることから、独立性が高いものであると考えられる。〈3d,e〉では、ポーズや「と」が付いても適格である。ただし、「と」が付くパターン③の方がより適格性が高い。従って、独立性はやや低いと考えられる。〈3f〉では、ポーズも「と」も付くことができる。ただし、反復形に「と」が付いたパターン⑦の適格性が高いことから、独立性は低いと考えられる。〈3i〉では、単独でもポーズが付く形でも適格であることから、独立性は高いと考えられる。⁹

以上より、〈3〉の感動詞の独立性を図式化すると、【図4】のようになる。



【図4】 〈3〉の分類

次に、〈4〉「うわっ」について見ていく。この調査では、次のようなコンテキストを使用している。¹⁰

- <4> a. A: 昨日の夜ね、すごい夢をみたよ。
 B: どんな夢?
 A: 宝くじが当たって、うわっお金をもらったのよ。
 B: へー。
- b. A: 昨日の夜ね、すごい夢をみたよ。
 B: どんな夢?
 A: 宝くじが当たって、うわっなった。
 B: へー。
- c. A: 昨日の夜ね、すごい夢をみたよ。
 B: どんな夢?
 A: 宝くじが当たって、うわっ驚いた。

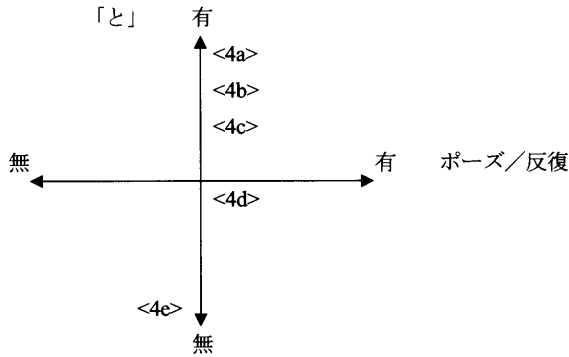
⁹ 〈3i〉の「うーん」に「と」を付けると「うーんと」になるため、「たくさん」を意味する「うんと」の変異形とインフォーマントが捉えてしまう傾向が高くなる。この問題については、調査者が調査時に注意をしている。

¹⁰ 〈4a〉では、感動詞の直後に、動詞ではなく、「お金を」が来ている。このヲ格（対格）の影響については、今回扱っていない。

- B：へー。
- d. 彼女の家へ行く途中で、雨がうわっ降ってきて、びしょ濡れになっちゃった。
- e. A：昨日ね、掃除のとき、引き出しを開けたら、怖い写真をうわっ見たんよ。
B：へー、そうなん。

<4a,b,c>の「うわっ」では、ポーズも「と」も付くことができる。ただし、「と」との結び付きの方が強いことから、独立性はやや弱いと言えるだろう。<4d>では、ポーズが付くパターン②の適格性がやや高くなっている。それに対して、「と」が付くパターン③の適格性はかなり低いと言える。従って、独立性はさほど高くはないと考えられる。<4e>では、ポーズも「と」もほとんど付くことはできない。インフォーマントによると、文中では不自然であるが、文頭では自然であるとのことである。従って、そもそも文中には現れることができないと考えるべきかもしれない。

以上より、<4>の感動詞「うわっ」の独立性は【図5】のように図式化できる。



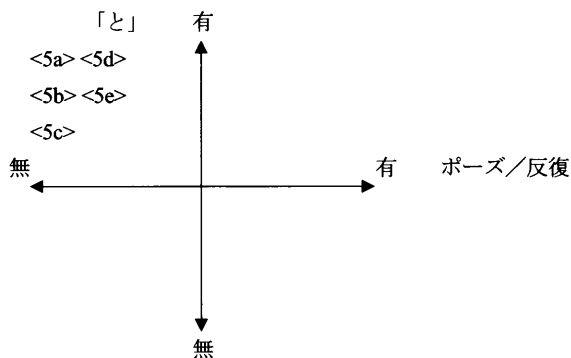
【図5】 <4>の分類

次に、<5>「わー」について見ていく。この調査では、次のようなコンテキストを使用している。

- <5> a. TOEIC 試験の900点を見て、わー喜び、飛び上がった。
b. TOEIC 試験の900点を見たとき、わー飛び上がった。
c. TOEIC 試験の900点を見たとき、わー興奮して、飛び上がった。
d. TOEIC 試験の900点を見て、わー驚いた。
e. TOEIC 試験の900点を見て、わーなった。

<5a,b,c>の「わー」は、「と」が付くパターン③のみに現れるため、独立性は低いと考えられる。<5d,e>では、「と」が付くパターン③の適格性は高い。ポーズが付くことはないが、感動詞単独で現れることがまれにある。従って、独立性はかなり低いと言えるだろう。

以上より、<5>の感動詞「わー」の独立性を図式化すると、【図6】のようになる。



【図6】 <5>の分類

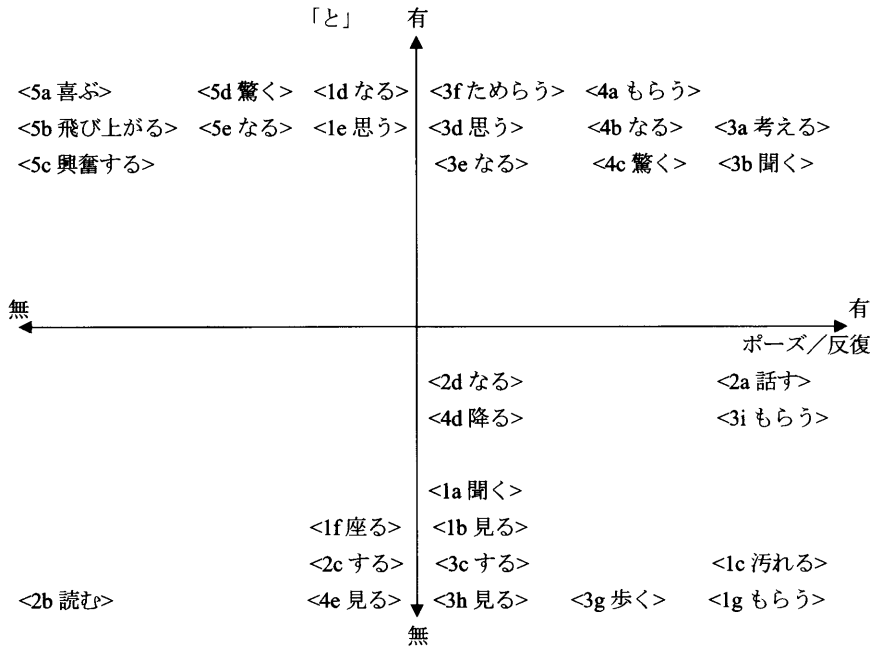
以上、コンテキストの違いによって異なる独立性の違いを解明するために、5種類の感動詞を2本のスケール上に図式化してきた。【図2】～【図6】を比較すると、感動詞によって図に偏りが見られることが分かる。例えば、まず「いやー」と「うーん」では図の右下に位置するコンテキストが多く見られる。これらは独立性の高いものである。逆に、「わー」は図の左上に位置し、独立性は弱いことが分かる。また、「うーん」と「うわっ」は大部分が図の右側に位置していることから、直後にポーズが入りやすい傾向にあることが見えてくる。即ち、「うわっ」も比較的独立性が高いものと考えられる。以上のことから考えると、独立性に関してはおよそ次のような階層になっていると仮定できる。

(13) 独立性の階層β：

「いやー」 > 「うーん」 > 「うわっ」 > 「ええああ」 > 「わー」

一方、この階層はコンテキストの違いによっても異なってくる。コンテキストの違いは、感動詞の直後に来る動詞の違いであるので、動詞を明記した上で、【図2】～【図6】を【図7】にまとめてみる。¹¹

¹¹【図7】では、便宜上動詞を終止形で挙げています。しかし、調査時の例文では、過去形も非過去形も用いられている。テンスが感動詞の問題に関わるかどうかについては、現時点では不明である。また、主節に現れるのか、従属節に現れるのか、という問題も関連があるかもしれないが、これについても現時点では保留する。



【図7】 共起する感動詞の独立性を促す動詞の分類

【図7】に示されている動詞を見ると、その違いによる偏りが観察できる。感動詞と共起して、その感動詞の独立性が最も高くなる動詞は、図中の右下にある「もらう」「汚れる」である。それに対して、最も低くなる動詞は、図中の左上の「喜ぶ」「飛び上がる」「興奮する」である。これらの中に位置する動詞は、「なる」「見る」等である。動詞「なる」は図中の上側に、そして「見る」は下側に分布している。少数ではあるが、「なる」と同様の分布を示す動詞には「思う」「驚く」があり、また「見る」と同様の分布を示す動詞には「する」がある。さらに、内面動詞（心的動詞）である「思う」「驚く」「喜ぶ」「興奮する」「考える」は図中の上側に分布している。これらにおいては、どのような感動詞と共起しても、感動詞の独立性は低いものと考えられる。

以上、分布が顕著である動詞のみを、共起する感動詞の独立性を促す度合いとして階層化してみると、次のようになる。

(4) 共起する感動詞の独立性を促す動詞の階層：

「もらう」>「見る」「する」>「なる」>内面動詞

この階層が何を意味しているのかについては、現時点では結論を得ていない。この階層が、動詞の意味に関与するのか、それとも他の文法的な問題に関わるのか、不明である。(4)では、内面動詞という用語を使っているが、これはアスペクトの観点からのカテゴリーである。内面動詞が偏った分布を成しているということは、感動詞の独立性の問題に時間性（アスペクト・テンス）が関与するのかもしれないが、これについても今後の課題である。ここで分かることは、感動詞の独立性の問題には、少なくともそれと共起する動詞の種類の問題が影響を与えている、ということである。

4. 3. 調査結果の比較

以上、第4、5回調査結果に基づき、感動詞の独立性の問題を記述してきた。4.1、4.2.で記述してきたことは、2点ある。1点目は感動詞そのものの独立性である。2点目は、感動詞と共起する動詞がどのように感動詞の独立性に貢献するか、ということである。2点目については、第5回調査のみから得られた結果であるため、比較はできない。従って、1点目について第4、5回調査結果を比較してみる。

1点目については、次のような2つの独立性の階層が得られた。

(12) 独立性の階層 α ：

「いやー」 > 「そうそう」「ええああ」 > 「おー」 > 「うわっ」 >
「わー」「へー」「えーっ」 > 「うーん」

(13) 独立性の階層 β ：

「いやー」 > 「うーん」 > 「うわっ」 > 「ええああ」 > 「わー」

(12)、(13)を比較すると、ほぼ同じような階層性を成していることが分かる。ただし、「うーん」については両者で大きく異なっている。感動詞「うーん」はおそらくコンテキストに左右されやすいのではないかと考えられる。そう考えると、コンテキストを加味した結果である(13)の方がより妥当性が高いのではなかろうか。

(13)を見ると、独立性が高い感動詞として、「いやー」「うーん」があるが、これらはいずれも心内の探索・検索中であることを示す形式である。一方、「うわっ」「わー」は驚きといった感情を示す形式であろう。おそらくこのような感動詞の意味がこの階層には関係していると予測されるが、なぜ前者の独立性が高いのかという問題については、現時点ではまだ解明できていない。ひょっとすると、心内の探索・検索中であることを示す形式は、文(命題)とは別の層(tier)にあり、それゆえ独立性が高いのかもしれない。

5. おわりに

本稿では、感動詞の独立性の問題、及びそれと与えるコンテキストの影響、特に共起する動詞の影響について議論してきた。この議論の趣旨は、感動詞の分類である。最初に述べたように、現時点の感動詞というカテゴリーには「応答詞」「感嘆詞」「相づち詞」等様々な種類のものが含まれている。また、これらの感動詞の使い方について、若年層では変化が起きている。即ち、感動詞というカテゴリーがその品詞を抜け出して、名詞や副詞等の他の品詞に転成している (cf. Vuong Thi Bich Lien (2012, 2013))。

これらのことから推測できることは、感動詞というカテゴリーはかなり広範囲にわたるもので、動態変化が激しい、即ちかなりの揺れ(バリエーション)を持っている、ということである。そうであるならば、何らかの階層性を成しているのではないか、何らかのスケールで測ることが可能ではないか、ということになる。本稿では、そのスケールとして、「ポーズとの共起/反復」及び「「と」との共起」という2本を仮定したのである。その結果、感動詞の独立性の階層だけではなく、この独立性に貢献する動詞の階層までも判明した。さらに、ここから、ある種の感動詞は文(命題)とは異なる層に存在しているのではないか、という予測も得られた。即ち、感動詞には、文(命題)の層に位置するものと、それとは異なる層に位置するものがあることになり、感動詞の類型論を議論できる可能性が生まれたのである。今後、これら

の仮説を検証することによって、感動詞の記述をさらに進めていきたい。

【参考文献】

- 洞澤伸 (2011) 「若者たちが使用する「ぼかし言葉 “かな、みたいな” と “って感じ” の語用論的機能」『岐阜大学地域科学部研究報告』28 pp.41-49
- 橋本進吉 (1979) 「語」『日本の言語学 第4巻 文法Ⅱ』服部四郎ほか編 大修館書店 pp.18-28 (『国語法要説』(明治書院, 1934年, pp.11-22) の再録)
- 鎌田修 (2000) 『日本語の引用』ひつじ書房
- 加藤陽子 (2005) 「話し言葉における発話末の「みたいな」について」『日本語教育』124 日本語教育学会編 pp.43-52
- 金水敏ほか (2000) 『時・否定と取り立て (日本語の文法2)』岩波書店
- 工藤真由美 (2002) 「日本語の文の成分」『現代日本語講座 第5巻 文法』飛田良文ほか編 明治書院 pp.101-119
- メイナード・K・泉子 (2002) 『会話分析』くろしお出版
- 三原健一・平岩健 (2006) 『新日本語の統語構造』松柏社
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 三矢重松 (1908) 『高等日本文法』明治書院
- 森山卓郎 (1989) 「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1 大阪大学文学部日本学科(言語系)編 pp.63-88
- (1996) 「情動的感動詞考」『語文』65 大阪大学国語国文学会編 pp.51-62
- 中島悦子 (2011) 『自然談話の文法—疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞—』おうふう
- 日本語記述文法研究会編 (2007) 『現代日本語文法③』くろしお出版
- (2010) 『現代日本語文法①』くろしお出版
- 仁田義雄ほか (2000) 『文の骨格 (日本語の文法1)』岩波書店
- 大場美穂子 (2009) 「文末に用いられる「みたいな」」『日本語と日本語教育』37 慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター編 pp.43-59
- 鈴木一彦ほか (1973) 『品詞別日本文法講座6』明治書院
- 高山善行 (2002) 『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房
- 田窪行則 (1992) 「談話管理の標識について」『文化言語学：その提言と建設』文化言語学編集委員会編 三省堂 pp.96-106 (『日本語の構造』(くろしお出版, 2010年, pp.161-172) に再録)
- (2005) 「感動詞の言語学的位置づけ」『月刊言語』34:11 大修館書店 pp.14-21
- ・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』音声文法研究会編 くろしお出版 pp.257-279
- 富樫純一 (2001) 「情報の獲得を示す談話標識について」『筑波日本語の研究』6 筑波大学文芸言語研究科日本語研究室編 pp.19-39
- 時枝誠記 (1950) 『日本文法 口語編』岩波書店
- (1989) 『日本文法 文語編』岩波書店
- Vuong Thi Bich Lien (2012) 「若年層における感動詞の品詞転成について」『東アジア研究』10 山口大学大学院東アジア研究科編 pp.53-65

- (2013)「若年層における感動詞の動態研究」山口大学大学院東アジア研究
科博士学位論文（未公刊）
- 渡辺実（1974）『国語文法論』笠間書院
- 山田孝雄（1979）「副詞」『日本の言語学 第4巻 文法Ⅱ』服部四郎ほか編 大修館書店
pp.283-302（『日本文法学概論』（寶文館，1936年，pp.367-394）の再録）
- 山口佳紀（1976）「4体言」『岩波講座 日本語6 文法Ⅰ』宮地裕ほか編 岩波書店 pp.129
-168
- 山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版